



第19号 2017.4.20 発行
 発行者：株式会社協進印刷
 編集者：JO 編集委員会

子どもにはすごい力がある それを認め、引き出したい。

認定NPO法人エンパワメントかながわ 理事長 阿部真紀さん



大学時代に学んだ臨床心理学を役立てたいと考えていたときに、アメリカの子供への暴力防止プログラムである「CAP（キャップ）」に出会い、2004年に有志とエンパワメントかながわを設立。他にもデートDVなど様々な暴力に関する問題を取り上げ、県内の小中学校を中心にワークショップ等を実施している。 <http://npo-ekong/>

江森：阿部さんは私たちの生活の中で起きる様々な「暴力」に向き合い、CAPプログラムなどを通じて「暴力のない社会」を目指して活動されていますが、この活動はいつから始められたのですか。

阿部：日本でCAPが始まったのは1995年ですが、私自身は1999年にCAPスぺシャリストという、CAPプログラムを実践できる資格を取得しました。その頃は7年間の海外生活を終えて帰国し、ちょうど下の子が小学校に入るときだったので、何かやりたいなと思って見つけたのがCAPだったということです。こういう活動をしている方の中には壮絶な経験をされている方も多いのですが、私の場合は特にこれといった理由もなく、たまたまCAPに出会ったというのが始めたきっかけです。
江森：当時の「子どもへの暴力」をめぐる社会の認識はどのようなものだったのですか。

阿部：CAP自体の知名度が低かったというところもありますが、学校には入れてもらえませんでしたね。放課後に希望者を集めて実施するというようなことをしていました。当時は「学校の授業に入れてもらう」ことが目標でした。その後、大阪で「池田小事件」が起きて、関西ではそれはもう大変だったようですが、全国的にも「子どもたちをどうやって守るのか？」というような議論が起きて、川崎市や鎌倉市の教育委員会が市内の小中学校でCAPを授業に導入してくださって、一気に広がっていききました。

江森：現在エンパワメントかながわでは、CAP以外にも様々なプログラムを展開していますね。

阿部：CAPというプログラムは世界中で展開されていますので、実施する上での制

約も厳しいですし、だからこそどこで受けても同じものが受けられるというメリットもあるのですが、CAPではカバーできないこともあるのです。それならばということとで、当時活動していたCAPの団体から独立してエンパワメントかながわを設立しました。それが2004年です。それ以来現在までに約7千4百回の様々なプログラムを25万人の子どもたちに提供してきました。

江森：みなさんが独自に開発したプログラムもあるのですか。

阿部：最初に作ったのは「デートDV」に関するものです。「デートDV」という言葉自体、日本では2003年の10月に生まれた言葉ですが、デートDVを放置しておけば、やがて虐待につながっていきますので、前段階で予防しておこうという考え方です。

次に開発したのは「すきっぷ」という小

学校低学年向けの護身プログラム。小学校1年生はランドセルに黄色いカバーをつけますよね。あれは交通安全という意味ではなくとも良いのですが、「防犯」という観点から見ると「私は1年生です」と言っているようなものです。だから自分の身を守る方法を教えることが必要だと感じたメンバーが開発したものです。そうやってどんどんプログラムが増えていきました（笑）。

江森：これまでエンパワメントかながわとして13年間活動してきて、どんなことを感じていますか。

阿部：CAPをやっているすごく感じるのが「子どもの力」です。たぶん今の私の仕事は出会ってきた子どもの力を大人に伝えることではないかなと思っていますね。「子どもってこんなにたくさんの力を持っているんだよ」ということを、大人たちに伝えていくことは、25万人の子どもたちに出会っ

てきたエンパワメントかながわだからこそ、やるべきことだと思っています。

江森..私もキャリア教育などでたくさんの子どもと出会いますが、小学生ぐらいだと発達段階的にまだ抽象概念が理解できないから、思考や発言が具体的になんですよ。大人みたいに曖昧なことを言って逃げたりしない、というかできない。そのことがかえって大きな力を生むというのは実感していますね。

阿部..CAPプログラムの中で基本的人権について考えてもらうのですが、子どもからはいろいろな意見がどんどん出てきますが、大人はすぐに固まってしまいますね(笑)。でもそのくせ大人って、子どもだからできない、障がいがあるからできない、できないできない、だからダメというメッセージを子どもに伝えてしまいがちです。

私たちは人権という観点から、人間は親子であっても先生と生徒であっても、すべて対等なんだということを伝えていけるので、実際には「親の言うことをきけ」「先生の言うことをきけ」と言ってしまうていまずよね。ある中学校で体育館に生徒が集まってもらって、私たちが丁寧に丁寧に人間は対等なんだから、お互いを尊重しようねという話をしてすごく盛り上がったんですが、終わったら先生が出てきて「お前らなにやってんだ！早く並べー」ってやっちゃ

う。もう一台無しじゃない！って思います。**江森**..それはつまり、子どもが「自分ではできる」とか「人間は対等だ」と思うことが、暴力の防止につながっていくと考えているということですか。

阿部..私たちの会の名前の「エンパワメント」とは、「力を引き出す」ということです。暴力に対抗できる力を引き出すのが、私たちの仕事です。「ダメだダメだ」と言っていたのでは、力は潰されてしまいますよね。最終的には大人が子どもを守ってあげるのではなく、子どもが自分で自分の身を守るために、もともと持っている自分の力を出せる状態にしておくことが大事なんだと思います。

江森..いじめや暴力の問題が出るとすぐに「それはいかん！」と噴き上がって、とにかくあってはならないことだから「撲滅しろ！」ということになりがちですが、私はこれにとでも違和感があります。人間の暴力性って自然のことだと思っんですよ。問題はその誰の中にもある暴力にきちんと向き合って、いかに実行しないようにするかであって、「無いことが正しい」とするところがすでに歪んでいると思います。

阿部..確かに「禁止」には意味がないと思います。神奈川県先生の間ではデートDVに対する認識がだいぶ広がってきているのですが、デートDVだとわかると交際を「禁止する」んですよ。これはまったく意味がないのですが、結局先生も保護者もそれしか対応方法を知らないんですね。そうではなくて、困ったら誰かに助けをもらっていいよ、お互い助け合うことができるよねというメッセージを伝えていくことが大事だと思います。

江森..とかく善と悪とか、被害者と加害者



とか分けたがりませんが、私たちはどっちにもなる可能性があるわけですよ。だからどっちになっても、社会としてしっかり受け止めて、「お互い様だから助け合っていいよ」というふうになんが考えていくことしか、もし本気で暴力をなくそうと思うなら、それしか方法はないと思いますね。

阿部..社会のメッセージの中には「こうでなきゃダメ」「こうしなきゃダメ」とダメダメが多いのですが、そのひとつに「他人に迷惑をかけちゃダメ」というのもありますよね。DVの被害者の言葉に「私は人に迷惑をかけてはいけな」と言われて育ったので、こんなことを相談して迷惑をかけたくなかったというのがとても多いんです。「禁止」には弊害が多いんですよ。

江森..まあ、親の立場からすると、どうしてもそうなっちゃいますけどね…

阿部..そうですね(笑)。だからこそ私たちのような第三者の存在が必要なのです。

江森..こんなに素晴らしいCAPプログラムなのに、最近では行政予算がつかず、皆さん自ら寄付を募ってCAPを提供しているそうですね。これだけの実績があっても、しかも事態はますます深刻化しているにもかかわらず、どうしてそういうことになるのでしょうか。

阿部..ひとつには行政の委託事業というのは、ずっと続くわけではなくて、通常3年程度で終わってしまうからということがあります。もともと私たちもあまりに一気に広がったものだから、努力が足りなかったというのは反省すべきところだと思っています。でも、それにしても子どもに行政予算がつかないというのは本当に感じますね。学校のトイレに行ってみるとよくわかりませんが、洗浄便座がついていないなんて普通のこと、カギがしまらないとか、いまだに「これトイレ？」と目を疑うようなトイレがたくさんあります。

江森..子どもには選挙権がないですからね。CAPはともいろいろプログラムなので、民間の寄付だけを財源にしてもある程度やっていけるとは思いますが、すべての子どもたちに平等に教育の機会を与えるという「公教育」の理念を考えたときに、CAPの代わりになるプログラムがないのであれば、民間でまかなえない分ぐらいは行政予算を投入してほしいものですね。

阿部..行政予算がつかなくなっているから、皆さんに寄付をお願いしてきましたが、なかなか難しいです。「寄付」という言葉も日本の文化にはまだまだ馴染んでいないのだなと痛感しています。

江森..今後はどのような計画ですか。

阿部..いまデートDVの全国ネットワークを立ち上げていますが、この活動はいずれ独立させようと考えています。エンパワメントかながわとしては、まさにいま5ヶ年計画を策定中なのですが、地元の企業やコミュニティと子どもたちをつなげるプロジェクトを立ち上げたり、次の世代の若い担い手を育てたり、NPOとしても着実に力をつけていきたいです。

社会から暴力をなくしていくために——認定NPO法人エンパワメントかながわ

社会から暴力をなくしていくために「人権」「エンパワメント」「人と人のつながり」

が大切であると考え、神奈川県内を中心に人権啓発活動を行っている認定NPO法人エンパワメントかながわは、2004年に設立されました。

「CAP（子どもへの暴力防止）プログラム」を柱として「デートDV予防プログラム」「すきっぷ（子どもの護身法）プログラム」「特別支援学級に通う暴力防止（ほっと）プログラム」など、すべての人に人権があることを啓発していくためのプログラムを開発提供しています。

暴力から子どもたちを守る

CAPプログラム

CAPとは、Child Assault Prevention（子どもへの暴力防止）の頭文字をとったもので、子どもたちがいじめ、誘拐、虐待、性暴力など、さまざまな暴力に対して何ができるかを、子ども、保護者、教職員、地域のの人に伝える人権プログラムです。横浜、川崎はもとより、広く神奈川県内の約20万人の子どもたちに、CAPプログラムを実施してきました。学校の授業時間を使って、暴力が向かってきた時に自分を守るためにできることについて、ワークショップ形式

で意見や考えを出し合い、子どもたちと一緒に考えていきます。どんな人も「安心」「自信」「自由」の権利を持った大切な人：CAPを受けた子どもたちからは「いじめられていい人はいないとわかってよかった」「相談できるおとなはいるんだと思った」などの感想が寄せられています。

1万人の子どもに

CAPを届けるキャンペーン

「ひとりでも多くの子どもにCAPを届けたい」エンパワメントかながわでは、2014年9月から「1万人の子どもにC

APを届けるキャンペーン」を実施しています。学校の費用負担をなくし、賛同をいただいた方からの寄付とスタッフのボランティアによって、2017年3月末までに4352人の子どもたちにCAPを届けることができました。

1万円の寄付が集まると1クラス（40人まで）の子どもとその学校の保護者や教職員にCAPを提供することができます。ご興味のある方、キャンペーンにご協力いただける方はホームページまで。

<http://npo-ek.org/>



オンガクに、ありがとう

竹見正一



Sid Vicious
"My Way"

優雅で堂々とした大きなチャペルを背にして、ぼくたちは門を出た。えっちゃんが言う「大学、やっぱりええなあ」つれてマサキが「絶対に受かりたいから、先生に嫌われんようにせなあ」そしてパチオが「いやあ、綺麗なおねえさんいっぱいおるなあ」

来年通うことになるであろう、大学の見学会を終えた帰り道。時はすでに16時、軽食をとるためカフェバーへいくことになった。「歩ける距離やしこのまま川沿いを」と提案したけど、3人に猛反対されバスに乗る。観光客でいつも混雑しているバスだが、今日は最後部に横並びで座ることができた。「テニスがやで、テニスやるわ！」帰宅部のパチオが、座るや否や薄い宣言をした。「確かにテニスええよなあ、エイミーの先輩おつしなあ、うまいこといくやろなあ」続けてバレエ部のえっちゃんもニヤニヤしている。軽音部のマサキは学校案内パンフレットを開いている。端に座ったぼくは、窓越しに来月公開予定、シシリアンの看板を見つけ、（あ、はよ前売り買わな、チミノとブーズでおもろないはずがないやろ）と静かに興奮していた。

バスを降りたぼくたちは、散りきった桜並木を抜けアイヴィーに向かった。この店の2階にある店内を見下ろせる4人席に座る。ドリアとドリンクをそれぞれ頼み、一息ついて今夜のパーティーの話になった。「女子校中心やしレベル高いで」とえっちゃん。「音はユーロビートでおねがいし」とマサキ。「またマイケルフォーチュナティがラストなん？」とぼく。「もちろんギブミーアップ」とパチオ。「パペポのやつもええぞ」とえっちゃん。どんなんやっけ、聴かして、と、二人がウオークマンを取り出しイヤホンを片方ずつ突っ込んだ。聴き入っている二人を横目に、ぼくはマサキにどんどの最新音源を手に入れたことを伝えた。「今もってんの?!」と予想通りアツくなった彼にThat&sのMG-Xを差し出し、「ジンジャエル代だけでええよ」と手渡した。「めっちゃうれしいわ、ありがとう!」というので、「帰って買ったばかりのデンオンコンポで聴けよ、ユーロよりええぞ」とからかう。「まじかえろかな、なんか見学行ってペンキもせなあかん気がしてきたし」というので、おうおう帰れ帰れと煽った。店内にはシドヴィシヤスのマイウェイが流れている。ちょうどええ曲や、今日は変わる日やで。まじめなマサキを追いつめる。そのとき、マリちゃんが階段を登ってきた。マサキの彼女。マサキはどんなパーティーにも彼女を呼ぶ。これでマサキは帰れなくなった。案の定、さっさとカセットを鞆に押し込み「ドリア喰ったら、二人で先に行くわ」と言った。

デッドオアアライブでパーティーが始まった。ぼくはダンスフロアを背にしてカウンターに腰掛け、先日担任に言われた言葉を思い出していた。「今度さかろうたら、おまえ大学行へんようにすんど、おや泣くど、ええんかい」その担任の声を同じ教室で聞いていたマサキは「あかんで、あやまらな。とりあえず大学はいかな」と言った。とりあえず?とりあえずって?と怒りがノドから噴出しそうになった。しかし、ぼくはマサキになにも言わなかった。振り返るとマサキは楽しそうに踊っている。バンクが好きでギターを弾くマサキが別人のよう。彼の屈託の無さがうらやましい。素直になればそういうこと。妬みにまみれたぼくは、そんなことさえ封印してしまうほど、深く深い闇にいる。戦っているのか、逃げているのか、もう分からなくなってしまった。一気にビールを飲み干し席をたった。レッドレッドワインで柔らかくぬるい空気になったフロア。とにかく今夜はここじゃない、店を変えよう。

レゲエバーにつくと方々から声がかかる。ほっとする。そして急に寒くなった。逃げる為に戦っている、のか、という仮説が鮮明になった気がした。



大口の魅力を紹介する「大口自慢」。今回ご紹介するのは、オシャレな美容室rodina(ロディーナ)さん。場所



は、大口通商店街の子安駅寄り、国道1号線の近くです。オーナーの吉川さんにお話を伺いました。

「rodina」とは家族という意味で、お店に関わる全ての人と家族のような関係でありたい、家族のような愛を届けたい、そんな想いが詰まった名前です。ロディーナ通信やグリーティングカードのお届け、SNSを活用した情報発信にも熱心で、お子さんからおばあちゃんまで幅広い年齢層から支持されています。カット技術も素晴らしい、店長の三國屋さんをはじめとするスタイリストさんたちは、数々のコンテストで入賞しているツワモノ揃い。

大口の活性化にも貢献したいと、地元中学生の職業体験の受け入れや商店街の夏の夜店に参加するほか、吉川さんは地域食堂「大口夢」の会長も務めています。またママたちにはうれしい年に2回のキッズカットサービスデーを実施。ワンコイン500円で子供をカットしてくれるとあって



三國屋店長とスタッフのみなさん

当日は大賑わい！元気に迎え入れてくれるスタッフさんも、お店の装飾も子供向けに可愛く変身。仕上げに編み込みアレンジまでしてくれて、小学生の娘も大満足でした。
トキメキの春、rodinaでキレイになってみては？

rodina (ロディーナ)

横浜市神奈川区大口通2の7

電話番号：045(4339)2267

営業時間：月～土 10時～19時

日・祝 9時～18時

定休日：年末年始・お盆以外無休

大口自慢

台湾生3週間のインターンシップを実施

1月下旬、今年で7回目となる台湾国際企業人材育成センターから来たインターン生は、「日本で働きたい」という夢を抱いている礼儀正しい好青年 張念平(ちやうねんへい)くん。

仕事への貪欲さを兼ね備える張君には、日本企業に「日本語でプレゼンテーションするという難題が課されましたが、1社目の反省点を2社目で改善するなど、工夫して挑戦し見事クリア！

お客様からも様々なアドバイスを頂き、インターン終了時には「日本で働きたい気持ちが強くなった」と力強い言葉。ぜひその夢を叶えて欲しいと願っています。研修にご協力いただいた皆様には心より御礼申し上げます。



12月のありがとうの日は

「ゴミステーション寄贈」

会社の前のゴミ集積場でカラスや強風によってゴミが散乱している光景が目に残り、ありがたい日を機に、ゴミステーションを寄贈しました。その甲斐あってゴミの散乱が減り、ご近所の皆様にも喜んでいただきました。

これからも地域の環境づくりをお手伝いしていきたいと思えます。



教員向けにキャリア教育の講演

2月2日(木) 神奈川区の菅田小学校からの依頼で、江森社長がキャリア教育の講演を行いました。日頃「企業との連携が難しい」と感じていらつしやる先生方に、当社での取り組みや企業との連携のコツなどを紹介するとともに、進学だけではなく多様な進路の可能性を子供たちに教えて欲しいというメッセージをお伝えしました。

先生方からは、「子供の教育に意欲的な企業があるとわかって心強」などの声をいただきました。



平成28年度ステップアップセミナー「GP認定制度概要セミナー」を開催

サプライチェーンの充実を目指して開催してきた取引先向けセミナーを、平成28年度から「協進印刷ステップアップセミナー」として、弊社取引先のみならず、神奈川県印刷工業組合会員企業もお誘いして開催しました。講師に日本印刷産業連合会の小野里憲氏を招き、印刷業界の環境自主基準であるグリーンプリンティング(GP)認定制度の概要について勉強しました。



JO(ジェイ・オー)2017年4月号(第19号)

発行者：株式会社協進印刷

横浜市神奈川区大口仲町108番地

TEL：045(431)6611

FAX：050(3730)6273

URL：http://www.kyoshin-print.co.jp

